

地域経済構造分析

(雲南圏域)

平成19年3月

島根県

目 次

はじめに	1
1. 圏域の現状分析	3
(1) 人口の動向	3
(2) 産業の動向	4
(3) 主な地域資源	15
2. 圏域におけるマネーフロー等の現状	16
(1) 圏域における全体的なマネーフロー	16
(2) 公的資金フロー	17
3. 現状トレンドでみた将来の所得見通し	18
(1) 将来推計の必要性	18
(2) 将来推計の時点	18
(3) 推計の前提条件とした変化要因	18
(4) 具体的に影響する内容等の設定	19
(5) 現状トレンドからみた将来への影響	20
4. 地域経済活性化の方向性	22
(1) 各圏域に共通した活性化の方向性	22
(2) 圏域における活性化の方向性	23
(3) 定量的効果の例示	25

はじめに

【背景】

国・地方を通じて財政状況が悪化する中で、今後財政移転機能に大きな変化が予想される。また、人口減少・超少子高齢化社会の到来により、地域経済が負の循環に陥る懸念がある。こうした状況の中で、地域は経済的に自立していくことが求められている。

【目的】

県内の各地域は、公共事業依存度など経済構造に相当の差異があり、地域特性に応じた施策展開を進める必要がある。そこで、県内を広域市町村圏の7つの圏域（通勤圏等概ね経済的なまとまりのある圏域と判断できる圏域）に分け、圏域毎に調査分析を実施する。

この調査分析は、地域の経済的な自立に向けて、地域が主体となって知恵を絞り出していくための基礎的な材料を提示することを目的とする。

今後、本報告書を叩き台に地域毎に地域主体で地域の将来像が描かれることが期待される。

【調査分析の基本方針】

各地域でこの報告書を活用しやすくするため、次の基本スタンスで調査分析を行った。

実効的で実現性のある将来像を描くために、定量的に現状分析及び将来予測を行う。

《「方向」だけでなく、「量の裏付け」をもった客観的な検討》

実際には複雑な要素からなる地域経済ではあるが様々な事象をあえて省略し、シンプルな分析手法を採用する。

《汎用性の高い簡易な方法による現状分析及び将来予測》

【内容】

地域経済の現状を、定量的に把握、分析した上で、わかりやすく表現する。

人口減少や行財政改革などの影響を踏まえ、地域経済の将来を展望する。

その上で、将来に向けた地域経済活性化の方向性を提示する。

参考：7つの圏域図

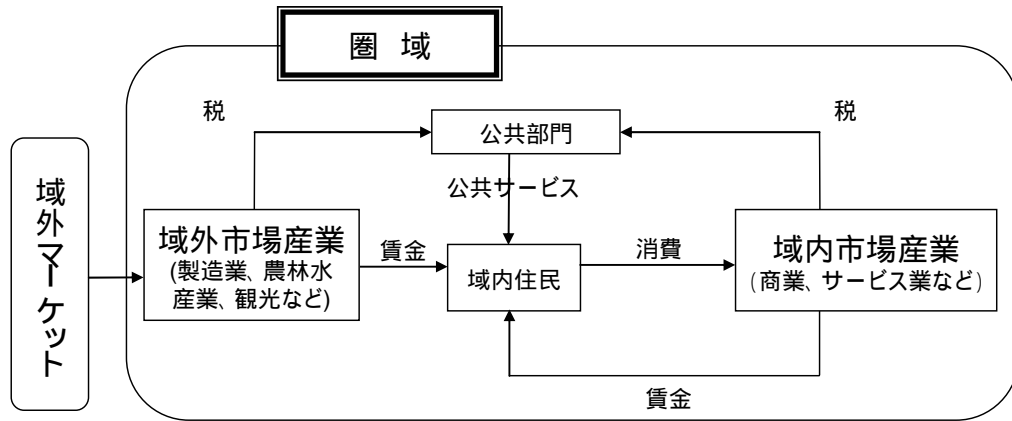


【地域経済成立の基本的捉え方】

地域経済を「域外市場産業」と「域内市場産業」に大きく分けて分析する。

域外市場産業が地域外からマネーを獲得することが、地域経済成立の条件となる。その上で、地域外から得たマネーを遺漏なく地域内で循環させることで、地域経済活動全体が活性化する。

なお、住民の雇用や所得を支える上では、域内市場産業が大きな役割を發揮している。

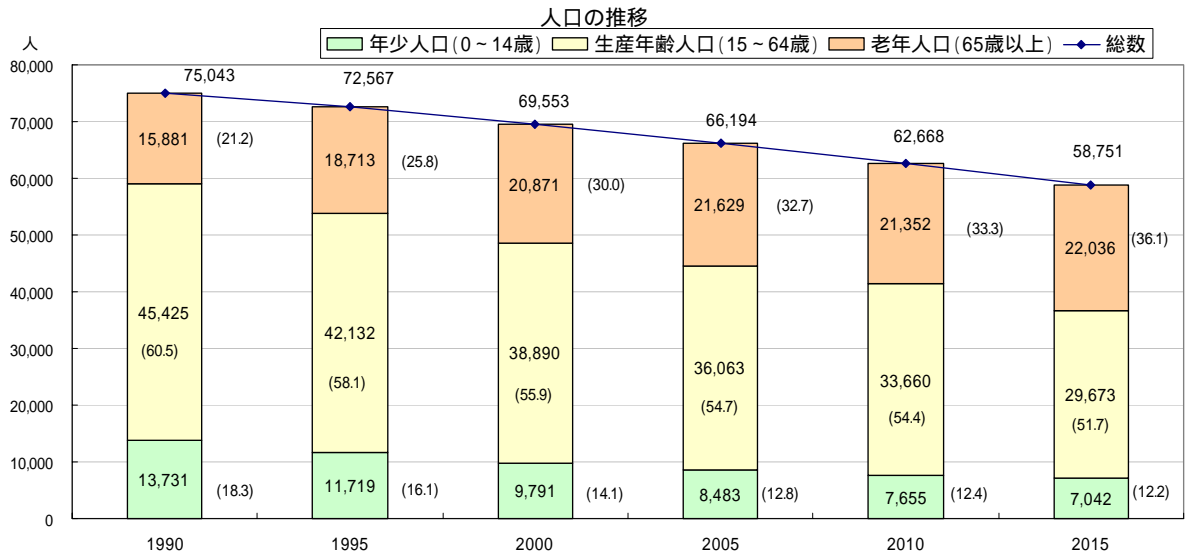


域外市場産業	主に地域外を市場とする産業 農林水産業、製造業・鉱業、旅館・宿泊業、運輸（水運）、 その他（対事業所サービスの一部、研究等）
域内市場産業	地域外よりはむしろ地域内を市場とする産業 建設業、商業、対事業所サービス、対個人サービス、 公共サービス（教育・医療等）、公務、その他（金融、不動産業等）

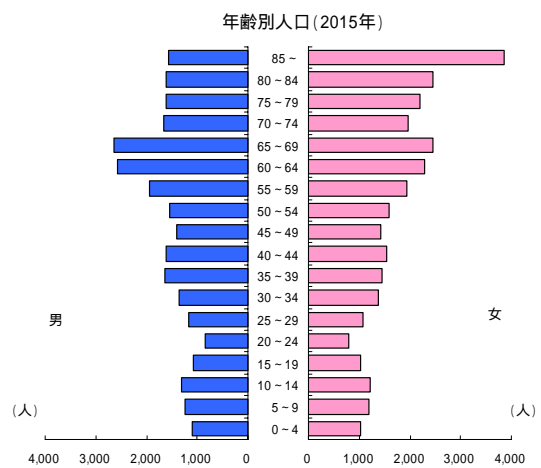
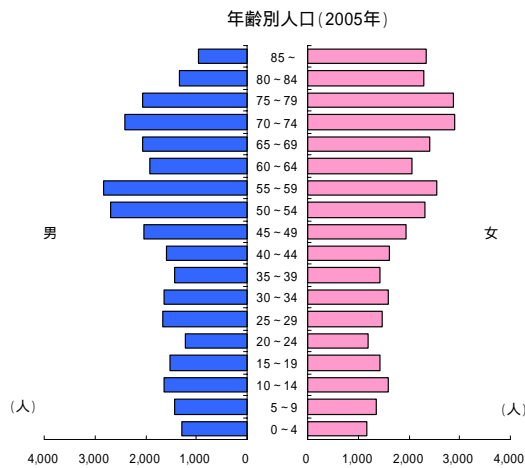
1. 圏域の現状分析

(1) 人口の動向

- 2005年の人口は66,194人
- 2015年の人口は58,751人(11.2%)、生産年齢人口は29,673人(17.7%)、老年人口は22,036人(1.9%)
- 人口減少による域内需要の減少が懸念される。



総数は年齢不詳を含む。



1990～2005年：『国勢調査』（総務省）

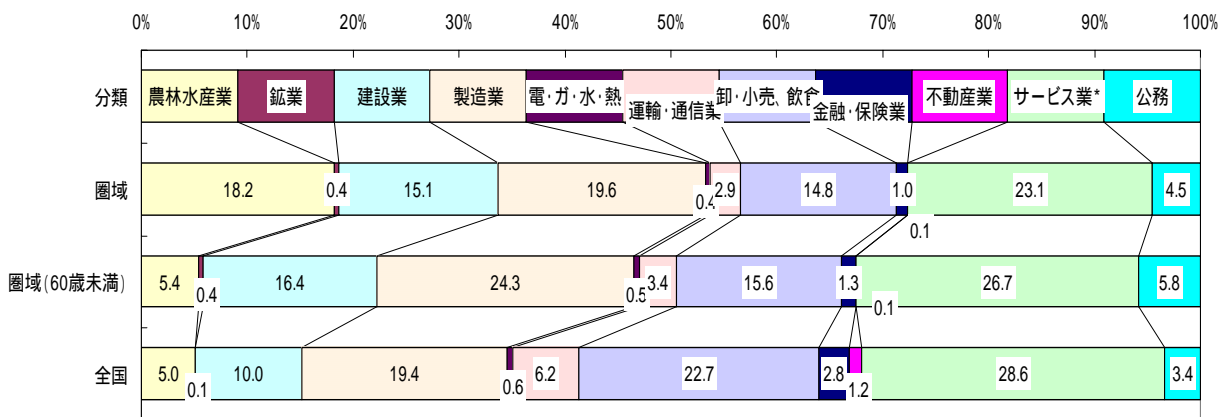
2010～2015年：『圏域別将来人口』（島根県）

(2) 産業の動向

視点1 住民の雇用を支えている産業は何か

- ・ 圏域全体で雇用を吸収している主な産業は、サービス業* (23.1%)、製造業 (19.6%)、農林水産業 (18.2%)、建設業 (15.1%)、卸小売・飲食店(14.8%)である。
- ・ 全国と比べると、農林水産業、建設業等のウェイトが高いが、サービス業*、卸小売・飲食店のウェイトは低い。
- ・ 農林水産業は、年代が高くなるほど就業者数が多くなる。
- ・ 建設業と公務は、財政上の制約等によって、今後は減少傾向に向かうと考えられる。

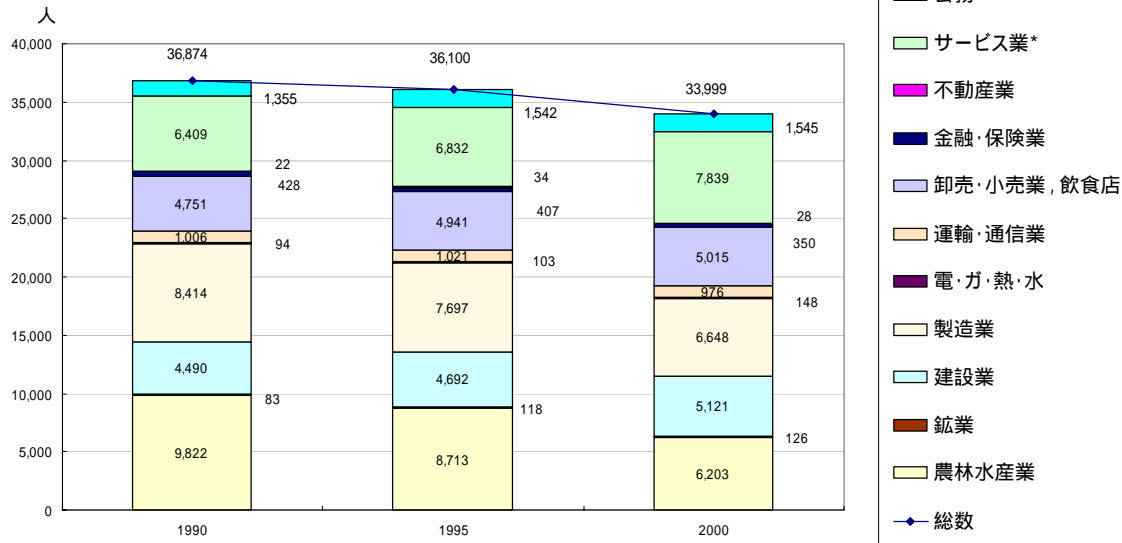
2000年産業別就業者数構成比



- 1 : 従業地ベース。
- 2 : 分類不能の産業はサービス業へ算入。
- 3 : 国勢調査の就業者数の「サービス業」は「サービス業*」と表記。飲食店が含まれない。

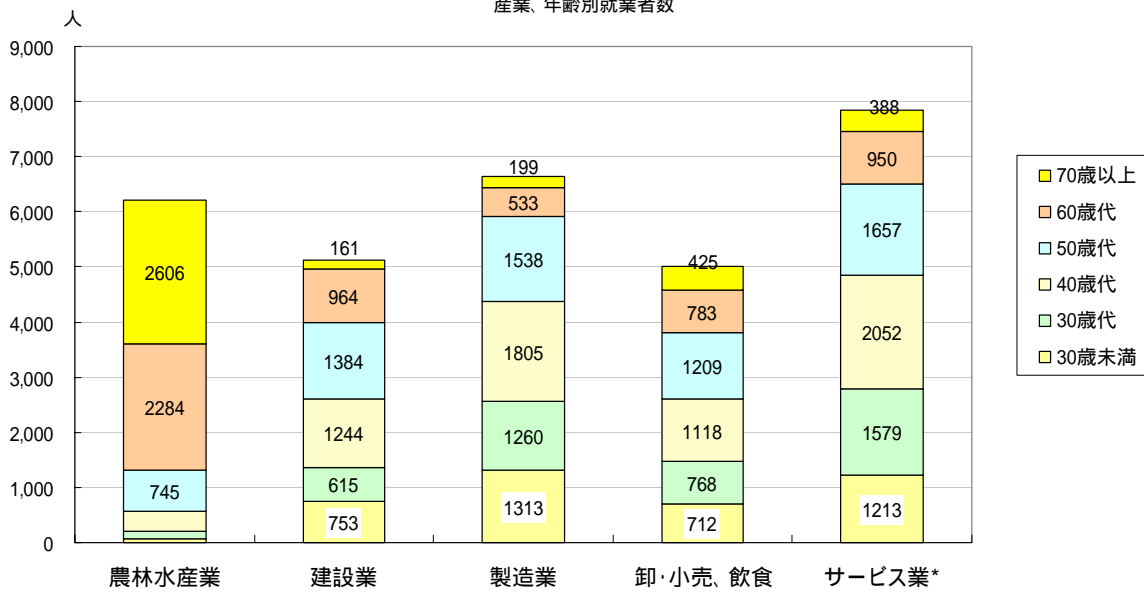
『国勢調査』(総務省)

産業別就業者数の推移



『国勢調査』(総務省)

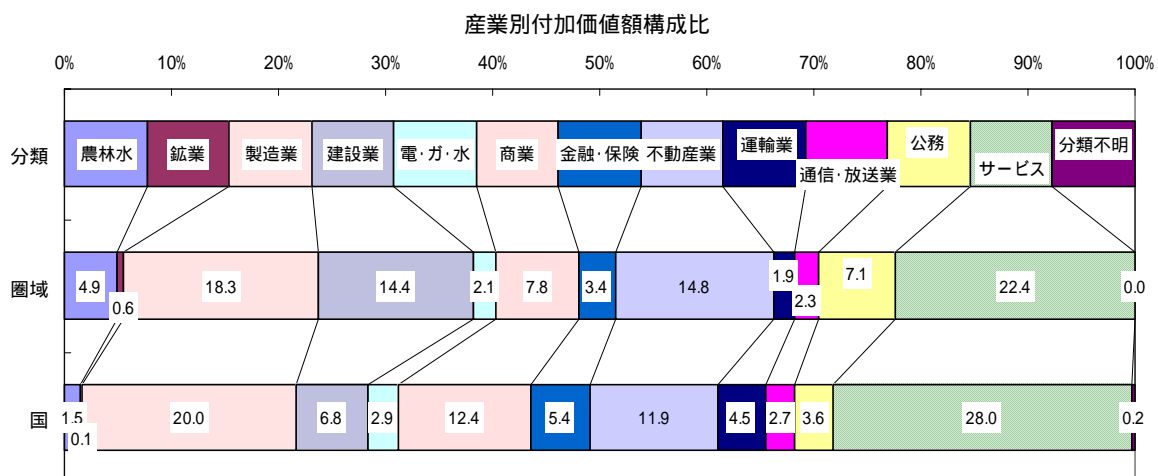
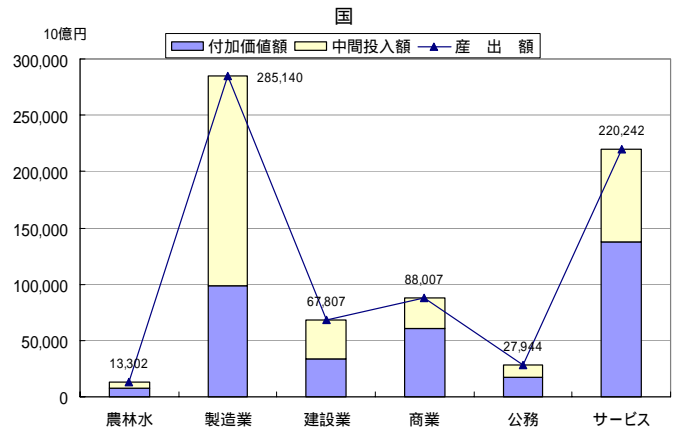
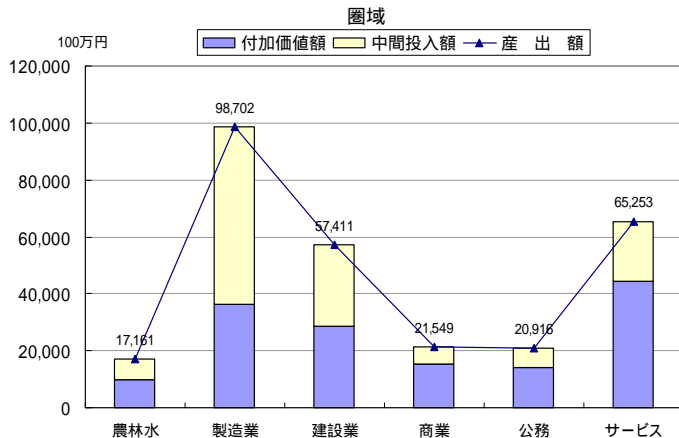
産業、年齢別就業者数



『国勢調査』(総務省)

視点2 それぞれの産業はどれだけの所得（付加価値）を生み出しているか

- ・ 全産業に占める業種別付加価値の割合は、サービス(22.4%)、製造業(18.3%)、建設業(14.4%)、商業(7.8%)、公務(7.1%)、農林水産業(4.9%)となっている。
- ・ 全国と比較すると、農林水産業、建設業、公務の比重が高い。



圏域値は国との比較のため、産出額、付加価値額から社会資本等減耗分を控除している。

圏域：『平成15年雲南圏域産業連関表』（島根県）

国：『平成15年簡易延長産業連関表』（経済産業省）

用語解説

産出額

各産業の生産活動によって生み出された財・サービスの額

中間投入額

各産業の生産活動に必要な原材料・燃料等の財及びサービスの購入額

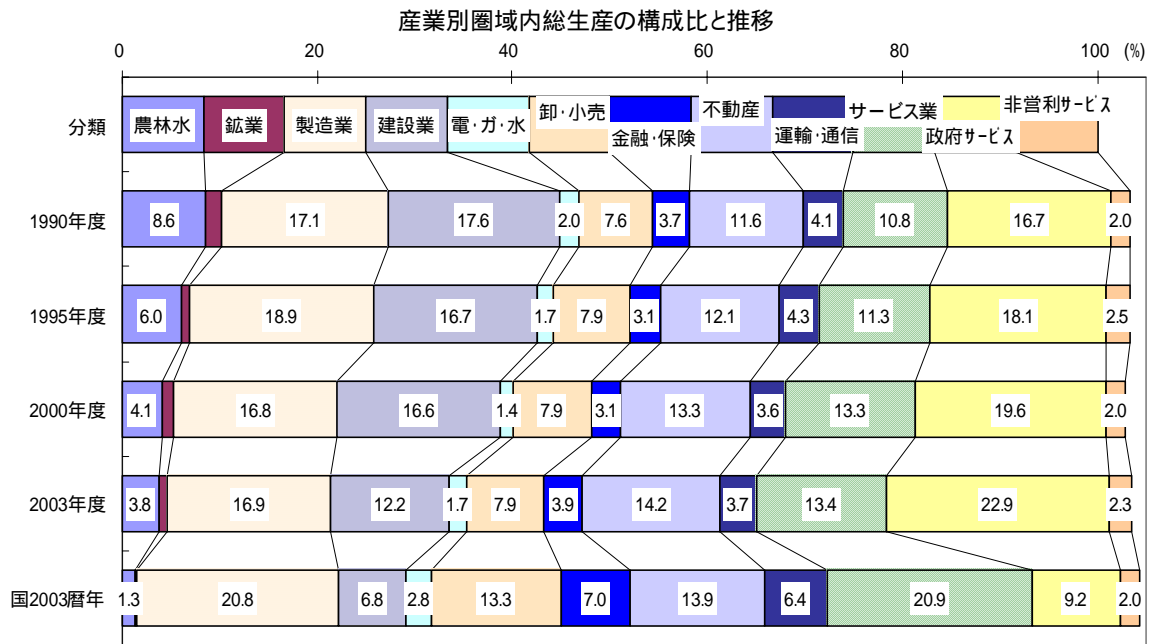
付加価値額

生産活動によって新たに付け加えられた価値で、いわゆるGDPに相当する額（雇業者所得、営業余剰など）

産出額 = 中間投入額 + 付加価値額である。

付加価値額が生活実感としての所得に近いので、ここ視点2では付加価値額を「所得」として表現した。

参考（市町村民経済計算からみた産業別構成比の推移）



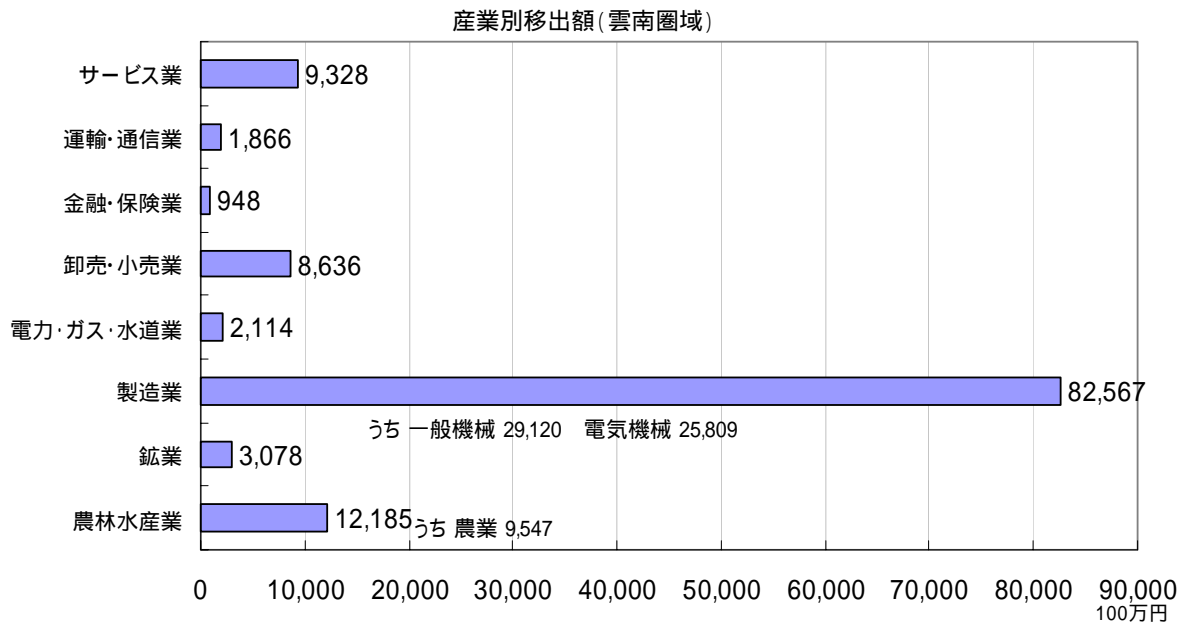
圏域（国）内総生産は帰属利子等の控除も含むため、構成比の総和は100%を超過する。
 不動産業の総生産には、持ち家の帰属家賃を含む。

圏域：『市町村民経済計算』（島根県）

国：『国民経済計算年報 平成17年版』（内閣府）

視点3 域外マネーを獲得している産業は何か

- ・ 移出額が大きい産業は、製造業であり、内訳は一般機械、電気機械等である。
- ・ 次に大きいのは、農林水産業で、そのほとんどは農業である。

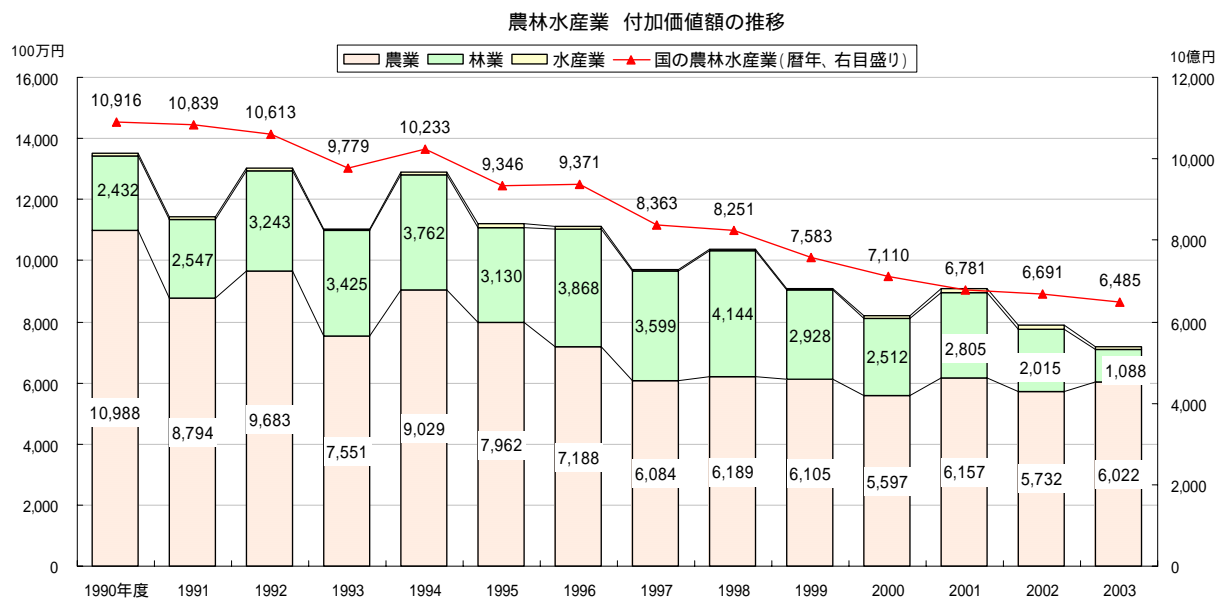


『平成15年雲南圏域産業連関表』(島根県)

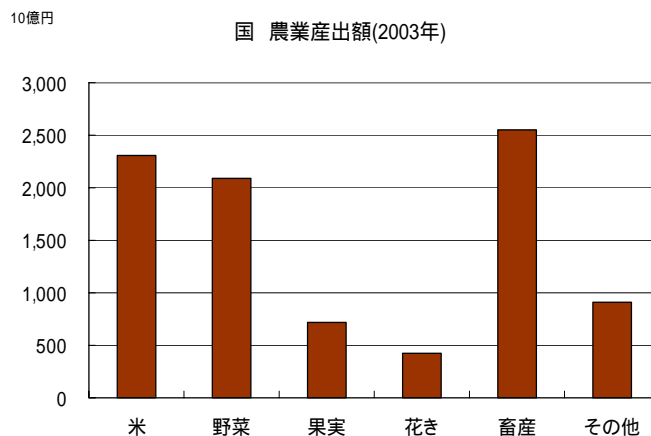
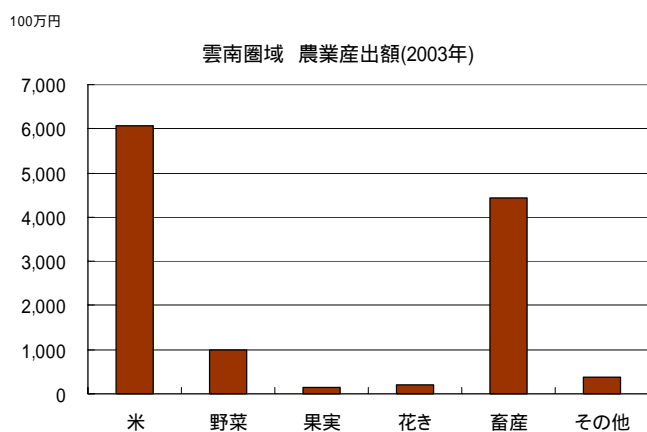
参考（主な産業の経年変化）

農林水産業の概観

- ・ 域内就業者数の 18.2%（全国平均 5.0%）、域内生産の 4.1%（全国平均 1.4%）を占めている（2000年）
- ・ 1995-2000年の域内就業者数の増加率は 28.8%（全国平均 16.9%）、域内生産の増加率は 26.9%（全国平均 23.9%）
- ・ 農林水産業は、就業者数、域内生産ともに減少している。



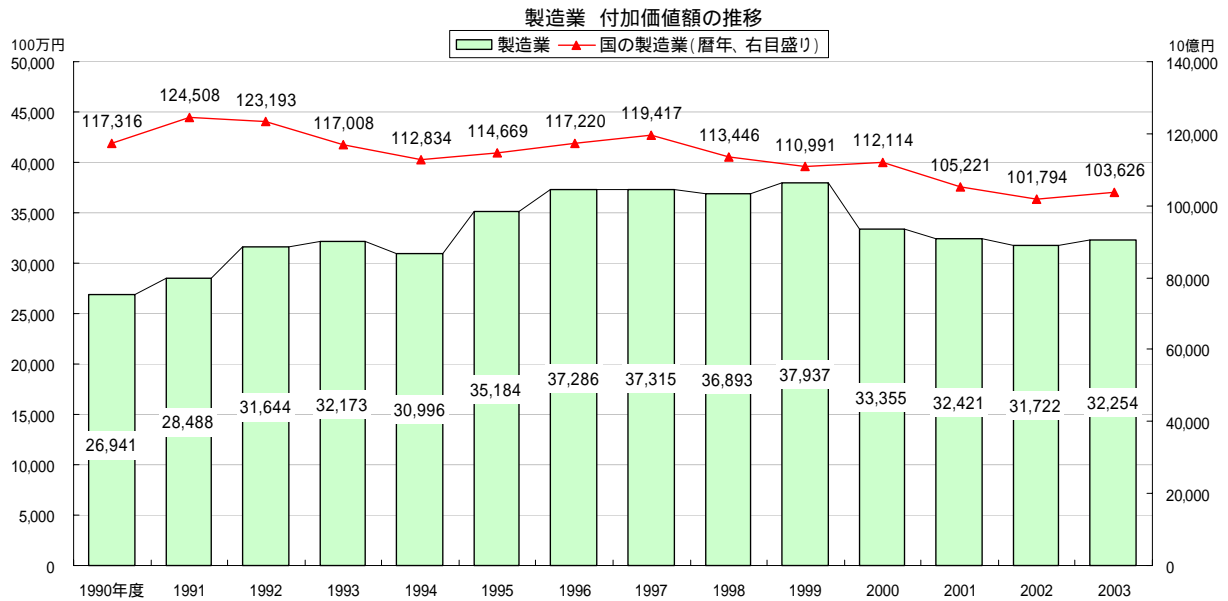
圏域：『市町村民経済計算』（島根県） 国：『国民経済計算年報 平成17年版』（内閣府）



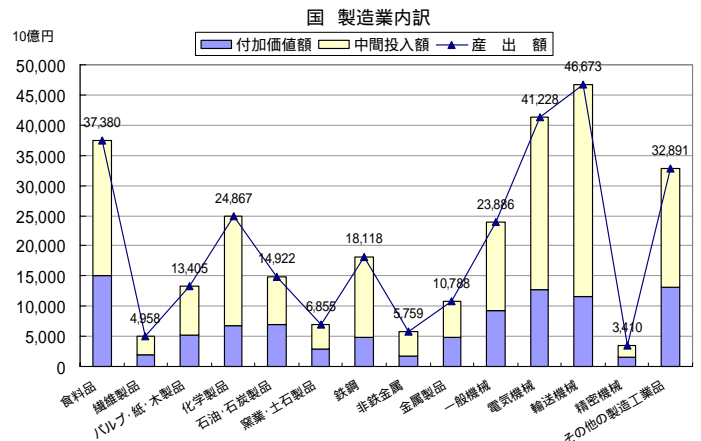
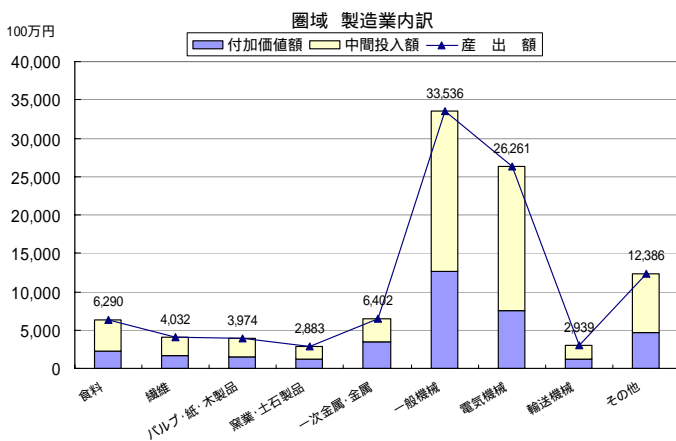
『生産農業所得統計』（農林水産省）
産業連関表の産出額とは異なる。

製造業の概観

- ・ 域内就業者数の 19.6% (全国平均 19.4%)、域内生産の 16.8% (全国平均 21.9%) を占めている (2000 年)。
- ・ 1995-2000 年の域内就業者数の増加率は 13.6% (全国平均 9.8%)、域内生産の増加率は 5.2% (全国平均 2.2%)。
- ・ 2000-2003 年の域内生産の増加率は、3.3% (全国平均 7.6%)。
- ・ 全国と比較すると、一般機械、電気機械の比重が高い。



圏域：『市町村民経済計算』（島根県） 国：『国民経済計算年報 平成 17 年版』（内閣府）



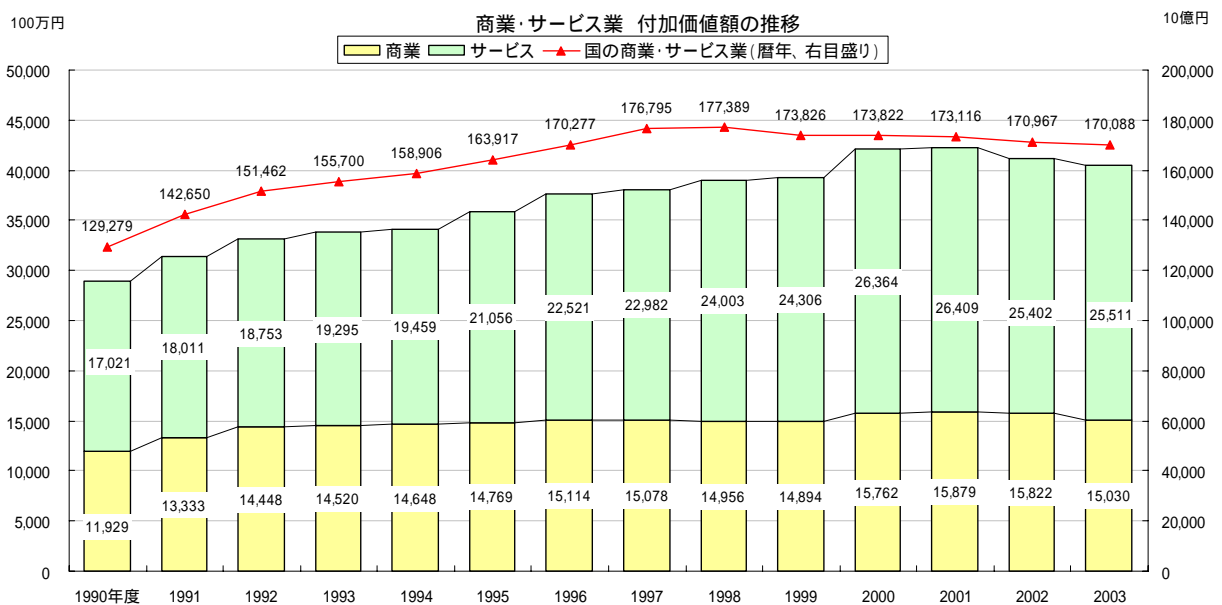
事業所数が少ないため、鉄鋼、非鉄金属、金属製品を一次金属・金属として統合、化学製品などはその他に統合。

圏域：『平成 15 年雲南圏域産業連関表』（島根県） 国：『平成 15 年簡易延長産業連関表』（経済産業省）

商業・サービス業の概観

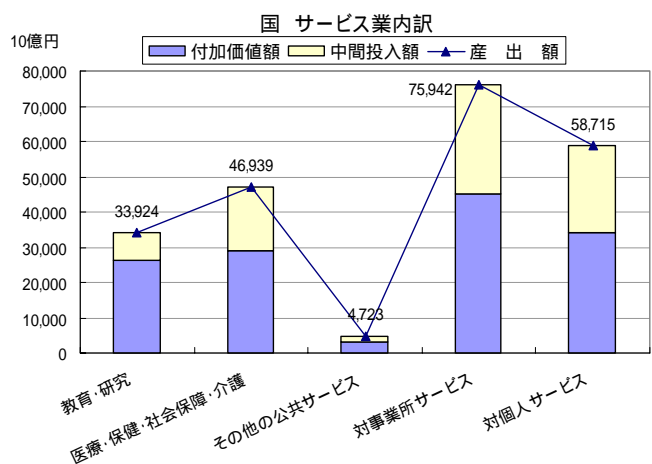
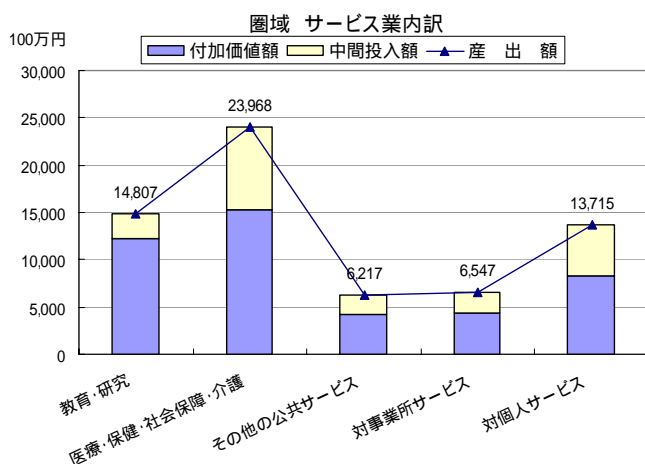
- ・ 商業は、域内就業者数(*1)の14.8%(全国平均22.7%)、域内生産の7.9%(全国平均13.7%)を占めている(2000年)。
- ・ 1995-2000年の域内就業者数の増加率は1.5%(全国平均2.1%)、域内生産の増加率は6.7%(全国平均7.5%)。全国は、就業者数、生産額ともに減少しているが、圏域では増加している。
- ・ サービス業は、域内就業者数(*2)の23.1%(全国平均28.6%)、域内生産の13.3%(全国平均20.3%)を占めている(2000年)。
- ・ 1995-2000年の域内就業者数の増加率は14.7%(全国平均10.1%)、域内生産の増加率は25.2%(全国平均17.7%)。就業者数、生産額ともに全国を上回って増加している。

*1：国勢調査の「就業者数(卸小売・飲食店)」 *2：国勢調査の「就業者数(サービス業)」(飲食店は含まない)



2000年度の介護保険導入により、他産業による介護サービス提供分が、サービス業に格付け変更された影響を含む。

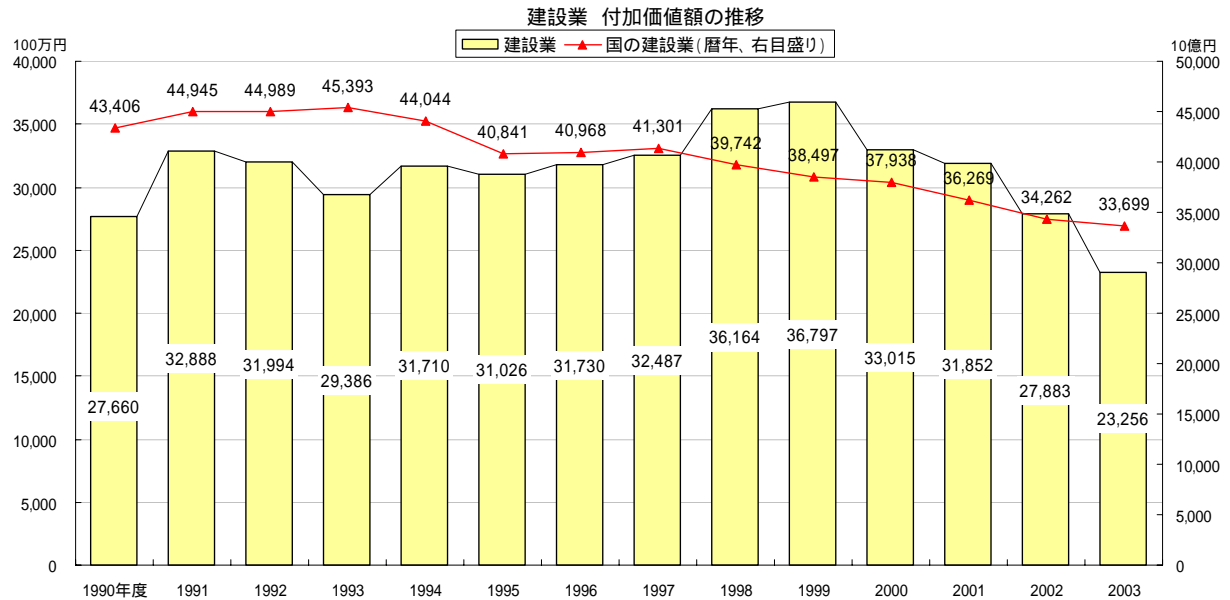
圏域：『市町村経済計算』(島根県) 国：『国民経済計算年報 平成17年版』(内閣府)



圏域：『平成15年雲南圏域産業連関表』(島根県) 国：『平成15年簡易延長産業連関表』(経済産業省)

建設業の概観

- ・ 域内就業者数の 15.1% (全国平均 10.0%)、域内生産の 16.6%(全国平均 7.4%)を占めている (2000年)。
- ・ 1995-2000年の域内就業者数の増加率は 9.1%(全国平均 5.1%)、域内生産の増加率は 6.4%(全国平均 7.1%)。
- ・ 2000-2003年の域内生産の増加率は、 29.6%(全国平均 11.2%)。



圏域：『市町村民経済計算』（島根県）、国：『国民経済計算年報 平成17年版』（内閣府）

視点4 消費は圏域内で行われているか

(域内住民が得た所得が、圏域内の需要として域内市場産業を支えているか)

- ・ 圏域内での購買が 69.1%、松江圏域への流出が 8.8%、出雲圏域への流出が 10.1%。
- ・ 生協の注文販売・通信販売が 4.3%、インターネット通販が 0.2%。

島根県商勢圏実態調査 (平成 16 年度島根県商工会連合会) をもとに、各市町村の人口で加重平均して算出。

雲南圏域の購買動向 (全商品)

内 容	地元購買率	他市町村への購買力流出率
70%以上		
50%以上70%未満		
30%以上50%未満		
10%以上30%未満		
5%以上10%未満		
5%未満		

前回調査は平成13年9月実施
市町村名は平成16年4月1日現在

【図の中の数値の意味】

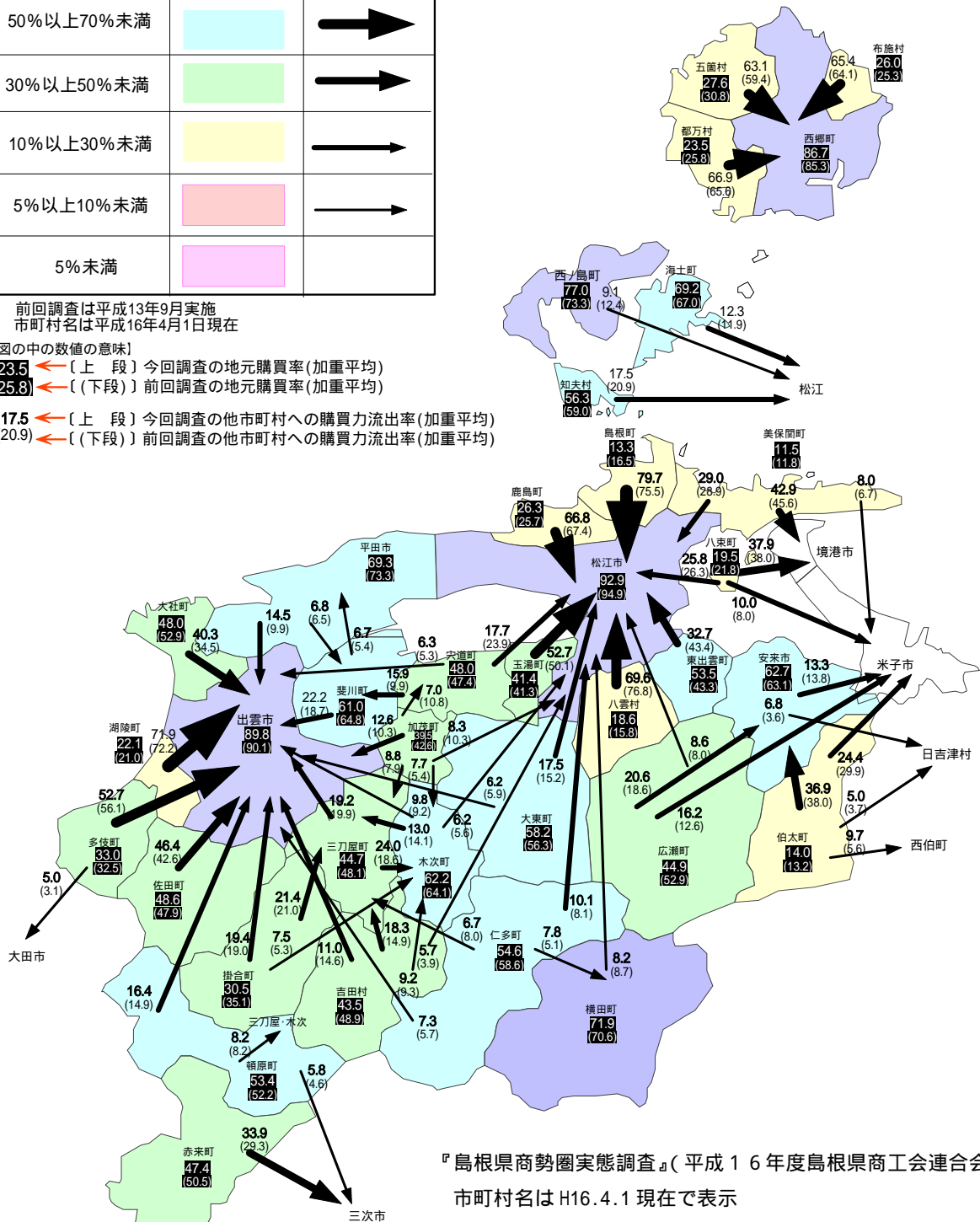
23.5 ←〔上 段〕今回調査の地元購買率(加重平均)

25.8 ←〔下段〕前回調査の地元購買率(加重平均)

17.5 ←〔上 段〕今回調査の他市町村への購買力流出率(加重平均)

20.9 ←〔下段〕前回調査の他市町村への購買力流出率(加重平均)

出雲・隠岐部商圏図(全商品)



『島根県商勢圏実態調査』(平成 16 年度島根県商工会連合会)
市町村名は H16.4.1 現在で表示

視点5 再投資は圏域内で行われているか

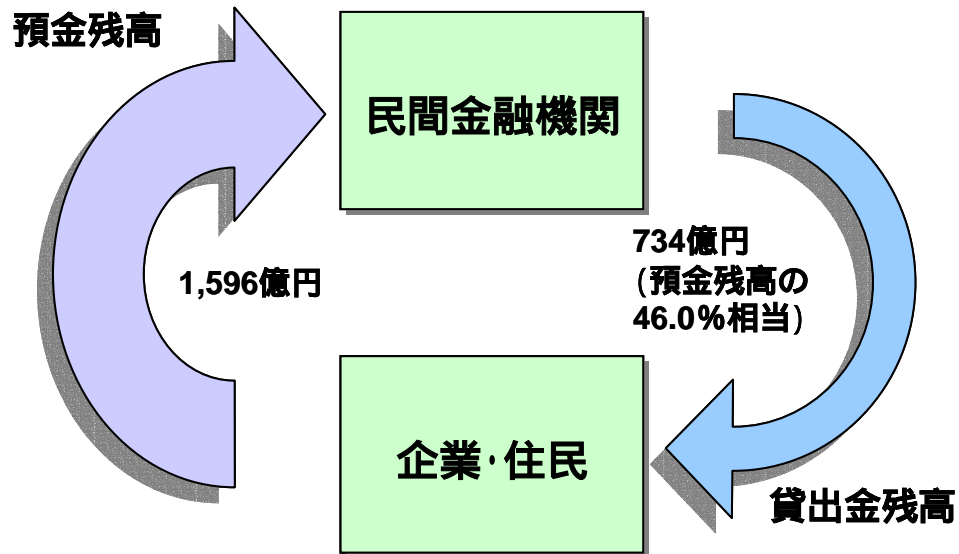
(圏域内経済活動の維持・拡大に不可欠な域内再投資の現状を把握する)

- ・ 圏域内での預貸比率は46.0%であり、域内再投資は低調。

預貸比率：圏域内への貸出金残高 / 圏域内からの預金残高

民間金融機関のみについての比率。民間金融機関への聞き取り結果による。

預金残高と貸出金残高（平成17年）



(3) 主な地域資源

雲南圏域の主な地域資源は次のとおりである。

分野	具体的な資源の例
交通・産業基盤	中国横断道尾道松江線 JR木次線
教育・職業能力開発施設	島根デザイン専門学校 大東高等学校、横田高等学校、三刀屋高等学校、飯南高等学校
観光	加茂岩倉遺跡、斐伊川・三刀屋川堤防の桜並木 鬼の舌震、可部屋集成館、絲原記念館 鉄の歴史博物館、龍頭が滝、八重滝 琴引フォレストパーク、島根県民の森 温泉（海潮温泉、湯村温泉等）

2. 圏域におけるマネーフロー等の現状

(1) 圏域における全体的なマネーフロー

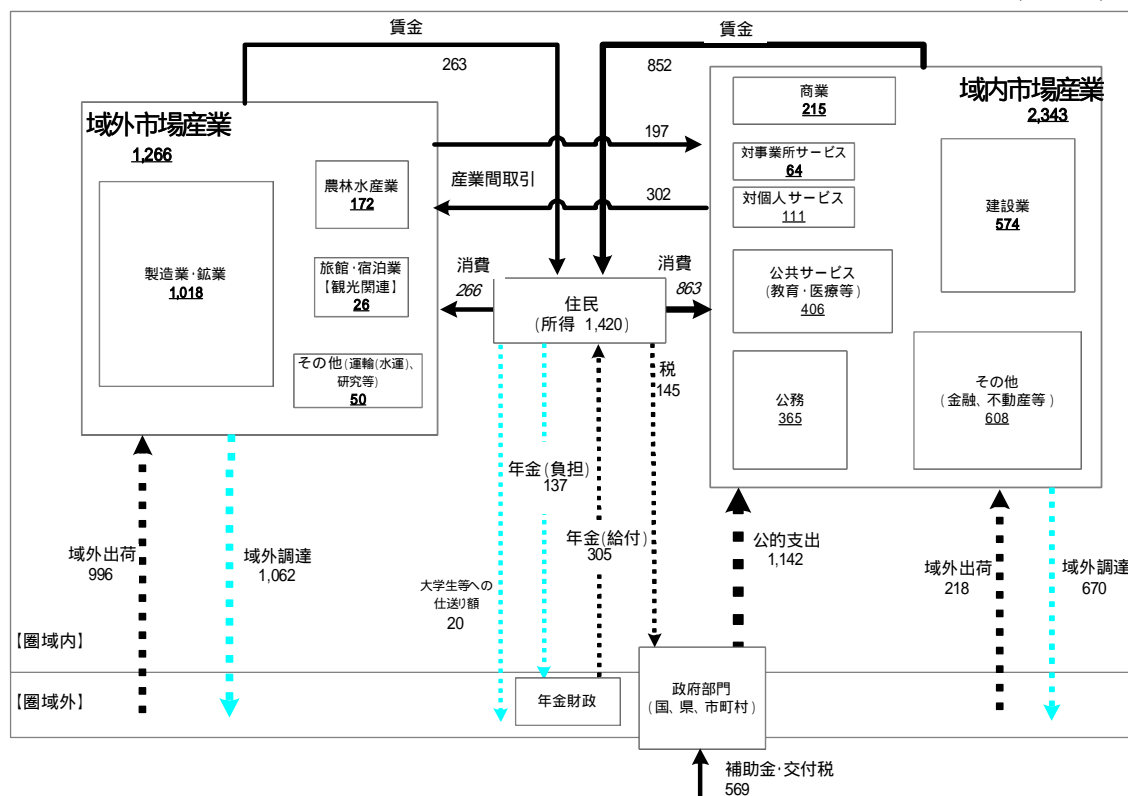
平成15年におけるマネーフローは以下のとおりである。

なお、分かりやすく表現することを優先し、預金・貸出(投資)、域外からの仕送り(子から親へ等)に関するフロー等は表示していない。

矢印はお金の流れを表す。

各産業の四角の中の数値は生産額を表す。

(単位:億円)



『平成15年雲南圏域産業連関表』(島根県)等による

産業部門の域外との収支は 518 億円

域外市場産業が域外に製品を出荷すること等により獲得している域外マネーは 996 億円。また、域外から製品や材料等を購入する等域外に支払っている金額は 1,062 億円。

域内市場産業が域外から獲得している域外マネーは 218 億円。また、域外からサービス等を購入している金額は 670 億円。

域外市場産業と域内市場産業を合わせた収支は 518 億円。一方で、域外から流入しているマネーには交付税、年金等があり、この額は域外との収支の赤字額を上回っている。この上回った差額は貯蓄に回っているものと考えられる。

なお、預貸比率が 46% であることから、貯蓄のうち域内での投資に回る額は半分程度に過ぎず、残りは大都市圏での投資や証券市場等へ流出していると考えられる。

住民の所得は域内市場産業の方が大きい

住民が域外市場産業から得ている賃金は 263 億円であるのに対し、域内市場産業の賃金は 852 億円であり、住民の雇用者所得を支える上では、域内市場産業の方が大きな役割を果たしている。

域内市場産業は公的支出に依存

域内市場産業の生産額 2,343 億円に対して公的支出が 1,142 億円であり、域内市場産業は公的支出に依存する構造になっている。

今後、財政上の制約等により公的支出が減少すると、自然体であれば域内市場産業が縮小することになり、域外市場産業が域外マネーを獲得していく必要がある。

(2) 公的資金フロー

圏域の経済において、公的資金の果たす役割は大きい。そこで、平成15年における国・県・市町村による支出、年金に関わる資金フローについてみると、以下のとおりである。

なお、このフロー図は、『平成15年雲南圏域産業連関表』(島根県)等をもとに、限られたデータを用い、大まかな傾向を分かりやすく表現することを目的として作成しているため、財源の一部等表示していない箇所がある。

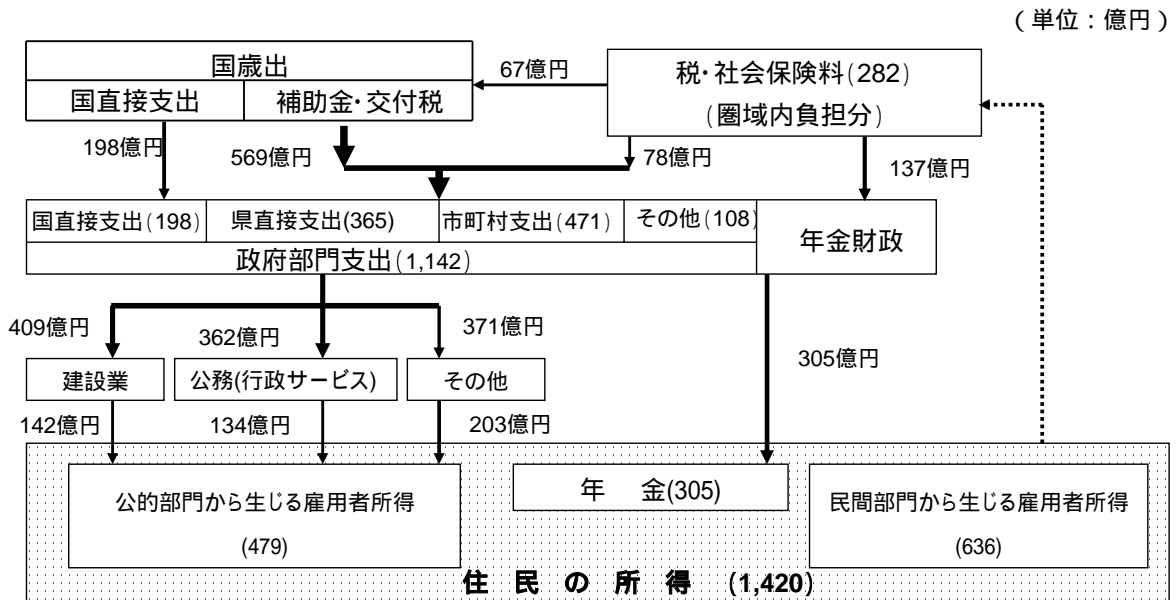
住民所得の公的部門への依存度が高い

住民の所得 1,420 億円のうち、公的部門から生じる雇用者所得と年金をあわせると、所得全体の55%を占めており、公的部門への依存度が高い。

公的支出の外部依存度が高い

政府部門支出 1,142 億円のうち、圏域内で負担している税は 145 億円(支出の13%)であり、その財源の多くを外部に依存している。

また、年金も含めた公的支出 1,447 億円のうち、圏域内で負担している税・社会保険料の額は 282 億円(支出の19%)であり、外部に大きく依存している



3．現状トレンドでみた将来の所得見通し

(1) 将来推計の必要性

それぞれの地域で将来像を描く前提として、将来所得がどう推移するのかについて試算が必要と考えた。

なお、将来推計にあたっては、地域毎に様々な主体がこの報告書をベースに将来像を描けるよう、経済モデルは構築しないで極力簡易な方法を用いることとした。また、前提条件として様々な事象を網羅することはせず、下記の条件に限定して推計することとした。

本推計は、今後の議論に供するため、そのような限定された手法による一つの試算であり、実際の姿は、地域における様々な取り組みにより、機械的な試算結果とは相当異なったものになることに留意が必要である。

(2) 将来推計の時点

2003年(平成15年)を基準として、2015年(平成27年)における所得の変化を推計した。

(3) 推計の前提条件とした変化要因

前提条件は、以下の3つの要因のみが地域経済に影響を及ぼすと想定した。

行財政改革に伴う地域への公共投資額や公務員数の変化

人口減少による地域内の購買力の減少

社会保障制度の変化に伴う年金の変化

試算にあたっての前提条件等について

- ・行財政改革に伴う公共投資額や公務員数の減少を見込んでいるが、他の分野への公的支出の変化は考慮していない。
- ・経済成長や生産性の向上は考慮していない。
- ・従って、変化を想定する分野以外は、現状のまま(生産額一定)推移すると仮定。

(4) 具体的に影響する内容等の設定

推計の前提条件とする変化要因の具体的に影響する内容と変化規模の想定を行った。

影響要因からみたその内容と変化規模の想定

影響要因	具体的に影響する内容	変化規模の想定
行財政改革等の影響	県・市町村による公共事業の減少	県：平成16年度の公共事業費の水準に対して半減 市町村：各市町村の財政計画における公共事業削減を反映 233億円(52.8%)
	県・市町村の人件費削減(公務員数等の減少)	県：定員削減計画及び給与改定分を反映 市町村：各市町村の財政計画における人件費削減を反映 30億円(16.6%)
人口減少	地域内消費の減少	平成17年国勢調査をもとに、県において圏域別の将来人口を推計 人口減少に比例して民間消費支出の減少を反映 153億円(13.5%)
社会保障制度の変化	年金受給額の変化	一人あたり平均受給単価が1割減少すると仮定し、65歳以上人口の推計値と併せて年金受給額を推計 年金受給額の変化に伴う民間消費支出の増減を反映 26億円(8.5%)

注：金額は、2003年と2015年を比較した場合の差とその割合

(5) 現状トレンドからみた将来への影響

上記で設定した条件に基づき、それぞれの要因が所得に及ぼす影響を、圏域別産業連関表を用いて他産業への波及効果(2次まで)も含めて試算した。

ここでの所得とは、雇用者所得+営業余剰をいい、県民所得とほぼ同じ概念である。

年金受給額そのものは所得額には含まれないが、この将来推計においては、年金増減が地域内消費の増減を通じて所得に及ぼす影響を計算している。

有効な取り組みを行わず現状のまま推移すると、2015年の所得は、現状(2003年1,473億円)に比べて、233億円(15.8%)減少する。

雲南圏域で減少する所得233億円は、2003年一人あたりの所得2,167千円で計算すると、約10,800人(雲南圏域の人口の15.8%)分の所得に相当する。

所得の減少により、雇用機会を求めることなどによる人口の流出をもたらすおそれがある。

この人口減少は、さらなる地域経済の縮小とそれに続く人口減少をもたらし、地域経済がスパイラル的に縮小するおそれがある。

こうした所得減少は、試算の前提とした各種条件と相まって、以下のような影響が生じることが懸念される。

域内市場産業は域内需要に密接に関連しているため、人口減少による域内需要の減少により、厳しい状況におかれる。域外市場産業も生産年齢人口の減少による生産力の制約などにより産業規模が縮小するおそれがあり、地域の雇用機会が維持できなくなるおそれがある。

産業活動の縮小による税収減により財政上の制約が強まる一方、高齢化率の上昇により行政サービスに対する需要が増大する中で、公的サービスや公共インフラを従来どおり提供できなくなるおそれがある。

地域の産業活動全体が縮小することにより、生活・産業関連の各種インフラの利用率が低下し、遊休化するおそれがある。

この推計において一定程度の地方交付税の減額は見込まれているが、今後さらなる削減が行われた場合は、地域経済を維持することが困難になることも想定される。

ただし、この推計は各地域の今後の新たな取り組みを想定しないで行っており、各地域の今後の取り組み如何によって、実際の地域の将来像は異なってくる。

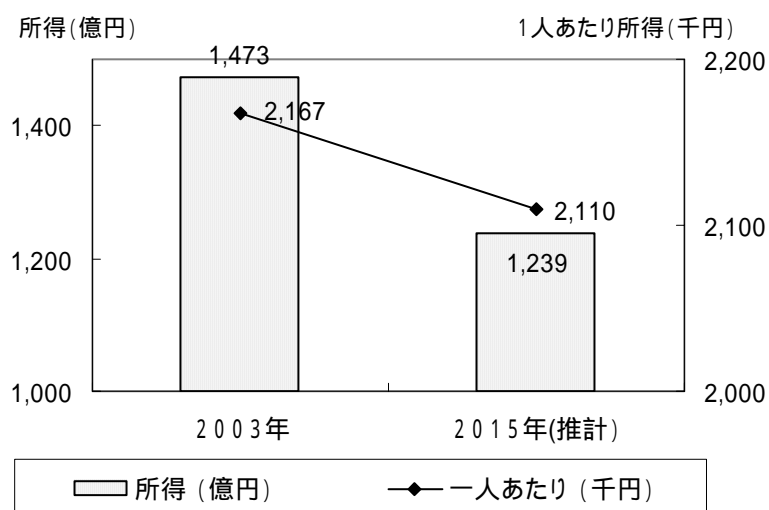
所得減少の内訳と所得の変化

減少する要因等	所得 (億円)
公共事業の減少による影響	-127
公務員数等の減少による影響	-38
人口減少による消費減少の影響	-61
年金減少による消費減少の影響	-7
合計	-233

	所得 (億円)	一人あたり (千円)
2003年	1,473	2,167
2015年(推計)	1,239	2,110
増減率	-15.8%	-2.6%

(参考)

	一人あたり (千円)	県・全国平均との格差
県平均	2,378	-11.3%
全国平均	2,817	-25.1%



人口一人あたり所得額で見ると、2015年においては2003年の水準に対し2.6%減少し、現在の生活水準を維持できないことを意味する。

4 . 地域経済活性化の方向性

キーワード：産業構造の転換

(1) 各圏域に共通した活性化の方向性

方向性 1：域外マネーの獲得 ～地域経済としての自立～

- ・ 公的支出への依存から脱却し、域外市場産業により域外からの所得を獲得する持続可能で自立型の経済の確立を目指す。

方向性 2：域内での経済循環を高める ～産業間での連携した取り組み～

- ・ 獲得した所得が、地域内の産業間で循環するよう産業連関構造を転換し、地域内での経済循環を高くすることを目指す。特に、域外市場産業と域内市場産業間での経済循環、所得循環を高める。

以上のような地域経済構造を実現するためには、全体として以下の取り組みが不可欠と考える。

地域毎の戦略策定

各地域が主体となって、地域の置かれた状況やそれぞれ活用可能な地域資源を的確に把握した上で、地域の目指すべき将来像を描き、実効的で実現性のある目標・アクションプランを策定すること。

選択と集中による産業振興

地域の潜在力を最大限発揮することが可能で、産業規模拡大の余地が大きいと考えられる域外市場産業の振興を、行政資源の集中投入によって重点的に行い、競争力のある域外市場産業の発展を図るとともに、地域内での経済循環を高めること。

また、投入した資源と得られた効果を常に見極めた上で、最大限の効果が図られるよう選択と集中に努めること。

地域の協働

地域毎に、行政、経済界、企業、大学等教育機関、住民、NPOが産業振興に向けて意識を共有し、連携して取り組むこと。

(2) 圏域における活性化の方向性

方向性1：域外マネーの獲得 ～地域経済としての自立～

全般

第1次から第3次産業まで業界横断的に事業主体が連携して商品開発や販路開拓に取り組むことができる仕組みづくりを進め、業種を超えた技術の融合によって、新しい商品や技術の開発や産業の高付加価値化を進める取り組みを進める必要がある。

企業誘致による立地が進みつつあり、地場系企業においては営業面・技術面での自助努力を強化するとともに、圏域内の企業連携を推進していく必要がある。

優れた環境や水を背景とする農産品の県外市場への取り組みの強化が必要である。

松江圏域や出雲圏域等と連携を図り、観光の周遊化を図る必要がある。

主な域外市場産業が域外マネーを獲得するための個別の取り組みについては、これまでもそれぞれ推進されてきたところであるが、今後一層強化していく必要がある。

今後の検討材料として、主な域外市場産業について考えられる取り組みの方向性を例示する。

産 業	取り組みの方向性
製造業	<ul style="list-style-type: none"> 独自技術を持った製造業の育成 圏域の実績を活かし技術集約型産業の育成
	<ul style="list-style-type: none"> 地域資源を活かした食品加工業産業の振興・誘致
	<ul style="list-style-type: none"> 地域の伝統産品（木工品・そろばん等）の振興 既存の技術を活用した、新たな展開を検討
農業	<ul style="list-style-type: none"> ブランドの確立 安全・安心など高付加価値化、仁多米等地域ブランドの確立（JA雲南の奥出雲ブランドの取り組み） 付加価値の理解へ向けたPR・宣伝活動、販路の確保
	<ul style="list-style-type: none"> 大規模農地の有効活用・遊休農地の流動化等による生産力の強化
	<ul style="list-style-type: none"> 自圏域や他圏域の観光関連産業への食材等の供給推進 みやげ物、食材等の供給
	<ul style="list-style-type: none"> 交流人口を対象とした「産直市」の一層の強化 道の駅等の「産直市」の強化（魅力ある品目、鮮度の高い産品）
観光関連産業	<ul style="list-style-type: none"> 広域的な周遊観光 出雲・雲南・大田圏域等県内他圏域や広島・鳥取西部との連携（県境を越えた周遊ルートづくり） 石見銀山遺跡の世界遺産登録・古代出雲歴史博物館開館を契機とした新たな周遊観光の実現 「鉄」をキーワードとした周遊観光の再構築（観光客にアピールする仕組みづくり）
	<ul style="list-style-type: none"> 既存の観光資源の活用と新たな観光資源の開発 自然、渓谷等を活かした観光ルート 森林セラピー・映画制作への取り組み
企業誘致	<ul style="list-style-type: none"> 企業誘致の推進 企業ニーズを深く掘り下げ、地域で共有 戦略に基づき業種を絞った企業誘致活動 中小企業誘致の推進 企業ニーズの高い尾道松江線の早期整備

方向性2：域内での経済循環を高める ～産業間での連携した取り組み～

獲得した所得が、地域内の産業間で循環するよう産業関連構造を転換し、域内での経済循環を高めることにより、地域経済の自立性を高めていくことが重要である。

産 業	取り組みの方向性
製造業	企業連携の推進（圏域内及び他圏域の企業連携） ・誘致系企業と地場企業との取引拡大 ・地場企業間の連携による事業機会拡大 （外注加工等の連携の強化）
農林水産業・関連産業	観光部門への食材・みやげ物の供給推進 ・第1次産品の域内での活用 移入農産物等の域内産品による代替推進
商業	商店の魅力向上 ・魅力ある個店づくりの推進、商店街のコンセプトづくり （地元消費をうながすしくみづくり）

(3) 定量的効果の例示

雲南圏域において域外から獲得するマネーの拡大や域内循環を高める産業構造転換等の取り組みを効果的に行うためには、その所得効果を予測した上で進める必要がある。

所得効果の予測に活用できるよう、先に述べた取り組みの方向性のうちさらに代表的なものについて、それぞれの取り組みが一定の成果をあげた場合に得られる所得効果を産業連関表により試算し、例示する。

雲南圏域における取り組みに伴う所得効果（例示）

域外マネーの獲得

取り組み	内容	所得効果 (億円)	参考
地域資源を活用した食品加工産業の振興	生産額が 10 億円増加	4.4	現在の生産額 52 億円
農業生産額の増加	生産額が 10 億円増加	4.4	現在の農業の生産額 78 億円
宿泊観光客の増加	宿泊観光客数が 1 万人増加 (1泊2日)	0.8	現在の年間宿泊観光客数 10 万人
戦略的取り組みによる企業誘致	生産額 10 億円の製造業を誘致	4.2	

域内の経済循環の強化

取り組み	内容	所得効果 (億円)	参考
企業連携の推進による製造業の生産額増	一般機械製造業の自給率が 5% 上昇(域内供給が 5.2 億円増加)	2.3	現在の生産額 335 億円
観光部門への食材、みやげ物の供給推進	農業の自給率が 5% 上昇 (域内供給が 1.3 億円増加) 食料品製造業の自給率が 5% 上昇 (域内供給が 4.7 億円増加)	2.8	現在の農業の生産額 78 億円 食料品製造業の生産額 52 億円
自圏域内での消費の推進	自圏域内消費比率が 1% 上昇 (域内の商品販売額が 6.3 億円増加)	1.4	現在の商品販売額 578 億円